
★不定期刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』」 第115号

-健康・農業・食・図書・人物情報・高齢者と若者の交流誌-

<http://nazuna.com/tom/>

2003. 8. 7 (木) 発行 西東京市・ひばりが丘 原田 勉

*****発行部数 1707 部*****

<キーワード>

健康・食べ物・農林園芸・図書を中心とした情報を提供し、庶民の歴史も残す。高齢者と若者の交流ミニコミ誌。お互いに情報を交流しましょう。

<★とても重要なお知らせ★ 原田から不定期刊行のお知らせです>

7月23日『電子耕』の締切編集集中から左目に雲がかかりましたので締切完了後に、眼科検診の結果「左目網膜に少量の出血が見られる」との診断でした。止血剤を飲んで5日後は一時止まりましたが、いずれ再発・進行するとのことです。

眼は脳神経の直接的な症状があらわれることは、72歳の時、右目の眼底出血で判っています。そこで8月2日に脳のMRI撮影をした結果、「脳の動脈硬化が進んでいて脳出血再発の危険性がある」と診断されました。

そこで、『電子耕』の発行も継続が難しくなりました。原田としては、近い将来に終わりとするか、それとも希望があれば、キーワードと発行所を変更してどこかで継続するかの決断を迫られています。その旨を編集同人に相談しましたところ編集同人の中には「農業マガジン『電子耕』として山崎農業研究所発行として継続できないか？」という申し入れが来ています。

私はできれば、しばらくこのままに不定期刊行とし、2ヵ月後位に編集長交代という形で私も編集同人の一人として参加したいと思います。従来 of 編集同人もできるだけ継続・寄稿して頂きたいと思っております。

従って今後の発行は(116号)不定期として(8月下旬から9月上旬)かと考えております。丁度夏休みにもなりますので少し休んで考えさせて下さい。

次の号には私の「編集長のご挨拶」を書かせて頂きたいと思っています。どうぞ宜しくご了解をお願い致します。

□ 目 次 □-----

<読者の声>

安澤さん、紀平さん、松山さん、柴田さん、長谷川さん、丹羽さん、松山さん、森さん、小川さん、斎藤さんから

<舌耕のネタ>「遺伝子組み換え（GM）作物の選択は自己責任か?!」

<山崎農研情報>季刊『耕』NO.97「拡大する遺伝子組換え作物」大山勝夫

<丹羽敏明の戦争体験>15、英軍の死体発掘をやらされる

<日本たまご事情>「どうして卵はこんなに安いのか？」愛鶏園・斎藤富士雄

<森 清の読後感>鶴見和子・多田富雄『邂逅・かいこう』藤原書店、2003年6月刊、2200円+税

<助けられた話>8/21「終戦後の陸海軍学徒はどこへ？」原田勉

<私の近況報告>7月24～8月6日（広島・桜隊原爆忌に参加）

<「メールマガジンの楽しみ方」電子書籍版のご案内>

<読者の声>（今後のメールには返信できないことが多くなると思いますが、ご了承下さい。『電子耕』の長い間のご愛読有り難うございました。原田から）

■7/22 安澤さんから

今年の梅雨は長いですね。

お元気ですか？

少しばかりご無沙汰しておりましたが、やっと高速通信に加入できました。その速度は以前とは比較になりません。

そのような事情で「電子耕」の受信も出来ませんでした。改めて配信頂けることになり、以前同様今から楽しみにしております。よろしく申し上げます。

毎日すっきりしとしない天候ですね。

どうかご自愛くださいますよう。

●原田からのコメント：

メール有り難うございました。

これからもよろしく。

■7/23 紀平さんから：

もうご存知かもしれませんが、毎日インタラクティブに
「平和インタラクティブ」が開設されました

戦後全ての広島平和宣言、長崎平和宣言のほか、「平和の目」をはじめとして
た本紙に掲載された平和関連の記事データベースを収録しています。都道府県
単位での平和関連記事の検索も可能です。

戦後すべての平和宣言をウェブ上に掲載するのは、おそらく日本で初めての試
みです。近いうちに、英語版、沖縄の平和宣言も掲載される予定です。

【平和インタラクティブ】

<http://www.mainichi.co.jp/eye/heiwa/index.html>

教育、食の安全、経済等すべての問題が「平和」につながっていて、平和だけ
を取り出して考えることは世の中の現状と遊離してしまう危険性があります。
しかし、常に全体も見るという意識を持ちながら、とことん平和を考えること
は大切なことだと思います。おそらく、その一助になればという思いで担当者
は開設したのだと推察します。

NPOの記事やリンクのリストも充実していて活用方法はいろいろありそうで
す。

●原田からのコメント：

お久しぶりメール有り難うございました。
お蔭で、「戦場に咲く花」も全部拝見しました。
監督の日本留学の意義に大いに感動しました。
今後日中合作映画が盛んになるよう祈ります。

■7/23 松山さんから：

「メールマガジンの楽しみ方」をご恵送頂き有り難うございました。実は、私
の実弟がWebbookを主宰しており2002/11/7で先生のこの著書を
紹介しており、その時点で拝読致しました。この度は、サイン入りのご著書を

頂き、大切に保管致します。先の本は親しい友達にプレゼントいたします。ありがとうございました。

黒ダイズの効果は必ずあると思いますが、米糠のご研究もなさってください。

築野食品 大和薬品 JAFRA を検索してみてください。興味ある情報が記載されています。

本では主婦の友社刊「抗癌力」でアラビノキシラン（米糠由来の抽出物）を紹介していますね。アラビノキシランは効果で積極的におすすめはしていませんが私のルートで少し安く入手できます。

それではどうぞお元気でお過ごし下さい。

●原田からのコメント：

"松山善之助" さん

どうも似たようなお名前とと思っていましたが、松山真之助さんですか。いろいろお世話になっています。ありがとうございました。

=====

■7/24 柴田さんから：

7月24日 『電子耕』朝着きました色々の方のご意見やもの見方があり楽しみにして拝見させて戴いております。

これからも宜しく願います。

24日 pm 4 : 25 柴田（80歳）

●原田からのコメント：

このたびは愚息がたいへんお世話になりました。ありがとうございました。インターネットもパソコンも大変興味深いことばかりですが、くれぐれも根詰めないようにほどほどに、のんびりと願います。

=====

■7/24 長谷川さんから：丹羽さんへ、長谷川より

お返事いただきありがとうございました。

丹羽さんのお手紙「桜隊原爆忌の会」世話人のみんなに見せたいと思います。特に園井恵子に対する思いなど、知ったら喜ぶでしょう。

兵隊さんが園井恵子のプロマイドを胸に戦地に行った。と言う話は聞いたことがございます。

当日参加いただけないのは、ほんとに残念でございますが、お身体どうぞお大事になさってくださいませ。

また何か思い出されましたらお聞かせ頂けたら幸せです。

丹羽さんの「戦争体験」 これからも心して読ませていただきます。

「夢のかけら」

<http://www.h3.dion.ne.jp/~nanchan/>

「桜隊」

<http://www.h6.dion.ne.jp/~skr-tai/>

■ 7/25 丹羽さんから：

114号の配信有り難うございました。『電子耕』の名に相応しく『耕』に掲載された記事の紹介がたくさんあって、どれも興味深く拝見しました。このサイトに重みが加わった感じがしました。

戦時中、戦意高揚のフレーズはたくさんありました。例えば「欲しがりません勝つまでは」とか「撃ちてしままん」などがありました。中でも最もインパクトの強かったのが「鬼畜米英」でした。このフレーズを象徴する出来事が病院船への攻撃です。私はつい最近までこの許すべからざる行為の真相をしりませんでした。元日赤看護婦さんの手記などを見て、愕然としました。当時敗戦の色濃厚な日本軍は、病院船を利用して、軍需物資や戦闘員を密かに運んでいたそうです。戦闘員に白衣を着せて傷病兵の如く見せかけたり、慰安婦まで載せたというに至っては呆れてものも言えません。ところが、これらの情報は米軍のいち早く知るところとなり、攻撃される羽目になったということです。このため多くの看護婦さんや軍医・衛生兵などが犠牲になりました。病院船はジュネーブ条約によって攻撃されることはないはずですが、「戦闘員や武器・弾薬は積まない」など細かな規約があり、これらの規約に違反した場合は攻撃されても文句は言えないわけです。こんな違法なことが公然と行われたのは、日本の赤十字は軍の組織に従属していたために、軍の上層部からの命令に逆らえなかったからだと言われていています。それにしても軍の幹部連中はジュネーブ条約のことは重々承知していながら、病院船に対して違法行為を強制していた訳で、鬼畜は米英ならぬ軍幹部と言って差し支えありません。どこの国でも戦争指導者というのは正常な理性の持ち主でないことがこの一事をもってしても

明らかです。戦争絶対反対！（参考文献＝守屋ミサ著『従軍看護婦の見た病院船・ヒロシマ』農山漁村文化協会・発行）

●原田からのコメント：

メール有り難うございました。

いよいよ、面白くなりましたね。今だからいえるけど本当にご苦労様でした。

では、またお願いします。

=====

■8/1 松山さんから：

謹啓、ようやく本格的な夏になりそうですが、コシヒカリはもう出穂ですので、今年の米は不作でしょうね。

血液さらさらのビデオは現在、貸し出し中のためしばらくお待ち下さい。

さて、近畿大学医学衛生学教室小川講師とアリュールン糠の機能性をマウスで検証する研究を進めており、関連サイトを覗いてみました。お送りします近畿大学腫瘍免疫等研究所で大変面白い研究が進んでおりました。ご一読下さい。

私はいつも人の嫌う損な役回りの研究をしてきましたが、それはそれで結構宝の山が隠されていました。

近年は農機販売会社でコイン精米機をたくさん販売した結果、顧客から米ぬかの始末を依頼され、米ぬか処理を研究しました。米ぬか油の会社、筑野食品（つの）で米ぬかのことを勉強しました。米ぬかからも面白い食品、薬品が取れることがわかりました。

黒豆研究成果は補完代替医療学会が生まれたときに発表し、多くの方に関心を持っていただきました。そのような経過から、このような分野の研究には目がいってしまいます。

近畿大学腫瘍免疫等研究所

<http://www.med.kindai.ac.jp/shuyo/index.html>

=====

■8/2 森さんから：

勉強、お加減いかがですか。しっかりとご養生下さい。

偶然ですが、少しは励ましになる書をご紹介できたかと愚案しております。

●原田からのコメント：

ご親切なメール有り難うございました。私は目を酷使していました。

1週間休んで、出血は止まりました。脳の検査もしましたら、思考中枢は痛んでいないのが判りました。動脈硬化の進行を遅らせるよう心がけます。短時間ずつ区切ってパソコンに向かいましょう。

一人では限界があるので、編集長を交代してもらおう準備をしています。

私は編集同人の一人になって電子耕を続けたいと思います。ご協力下さい。

■8/4 小川さんから：

耕の最新号を送っていただき、感謝します。

巻頭言など興味深い内容で、国を支える農業の重要さをあらためて認識しました。

ご活躍ぶりに敬服します。

近藤先生も早く回復されて、お元気になれば、と祈っております。

今後もよろしく。

簡単なメールのお礼で、失礼します。

●原田からのコメント：

メール有り難うございました。

会友に報告します。

■8/5 斎藤さんから：

やっと梅雨があけ、急にアブラゼミの声が聞こえてきました。

ゆっくり静養してください。

<舌耕のネタ> 「遺伝子組み換え（GM）作物の選択は自己責任か?!」

アメリカの企業が主に開発したGM作物は米国・ブラジル・アルゼンチン・中国などに広がっています。ヨーロッパ（EU）ではスペインなどの一部を除きGM作物の生産はすすんでおらず、輸入品にもラベル表示を義務つけています。これは欧米間での大きな対立になっています。

ブッシュ大頭領の選挙選の主要スポンサーは、遺伝子組換え食品会社と薬品

会社という報道もあります。さて日本の政権はどうしているか？

以下の大山勝夫さんの『耕』論文と追加コメントをご覧ください。

日本にはGMダイズやGMトウモロコシが大量に輸入されています。これらの生産や消費に責任はわれらの自己責任か？ それとも政府の責任か？

欧米の動きを注目しながら対処しなければならない時代になってきました。

(原田勉)

<山崎農研情報>季刊『耕』NO.97「拡大する遺伝子組換え作物」大山勝夫

山崎農業研究所第108回定例研究会より (文責 安富六郎)

◆「拡大する遺伝子組換え作物 (GMO)」話題提供 大山勝夫会員

(1) 世界の遺伝子組換え作物

世界のGMO作付け面積は増加しつつある。2002年では2001年の12%伸びで5868万haとなった。アメリカ、アルゼンチン、カナダ・・・が多い。作付けでは大豆、トウモロコシ、棉、カノーラ (ナタネ)・・・

GMO生産のねらいとする特性は除草剤耐性、病気耐性、ウイルス耐性など。GMO特性には生産者へのメリットが求められたが現在は消費者へのメリットが求められる方向に移行しつつある。

(2) GMO論争の背景にある問題

消費者が食べた後から、生産者あるいは国などが「安全性に問題があった」と言ったらどうするか。GMOは次々と新しく作られているので、安全性が論争の中心となる。

GMOにはつぎのような問題が出る。

生産→消費の過程で農家が個々に栽培するのではなく、アメリカなどの大企業が一括生産する。消費者の心配は、病気にならないか、生物多様性の崩壊につながらないか。この2点になろう。農業のマクドナルド化が進行する。農民のいない多国籍アグリビジネスが入ってくる。「利益と恩恵」にあずかる者は誰か？「危険」を背負う者は誰か？ということになろう。

(3) 研究者、技術者に求められる倫理

リスクは消費者が判断する。生産者はその制約を受けながら生産することになる。しかし危険度の水準の数値化は現状では困難である。リスクを背負うのは消費者だが、人間を実験台には使えない。安全性は他の薬品テストなどのように動物実験はできない。さらに安全性の捉え方にも色々ある。環境、飼料に与える影響を重視する農水省、食品に与える影響を重視する厚生省などがある、各分野でとらえ方が異なる。

(4) 問題提起

次のようなことが必要であろう。

- <1> (人や生態系への) 安全性評価の研究を重視し、予算の充実をはかる
- <2> ハイテク研究の透明性を確立する
- <3> 市民からなるリスク問題の情報伝達の充実をはかる
- <4> 科学者、技術者としての倫理を確立する

(5) 将来の夢

食べるワクチン、植物からプラスチック生産、などが出来る可能性があるかもしれない。

7/31

◆遺伝子組換え特集コメント

遺伝子組換え作物と EU の動き

コメント：大山勝夫

EU では1991年以来18種類の遺伝子組換え作物を認可をしていたが、98年以降は安全性に問題があるとして遺伝子組換え作物の新規認可を凍結していた(モントリアム)。これに対して米国側は「科学的な根拠もなしに遺伝子組換え食品が規制されるのは不当だ」としてWTOに提訴している。

最近の情報ではEU側は表示を条件に遺伝子組換え食品の流通を認める法案を準備しているようだが、米国に対する不信感は否めない状況だ。

また、今年の早魃で食糧難にも拘わらず、ザンビア政府は米国からの遺伝子組換えトウモロコシの提供を断ったという。これは援助に名を借りた押しつけとみられてもしかたあるまい。

先の研究会で私が話題提供したように、遺伝子組換え問題のひとつは食としての安全性、生態系・環境への影響であり、科学的な検証が急務である。他の一つはグローバリゼーションへの不安である。米国を中心とする一極支配

の構造が、これからの農業と食の場で進められてよいものであろうか。各国がそれぞれ食料主権の確保を前提に先端技術の導入をはかるべきであろう。

季刊『耕』NO.97の申し込み先（定価1000円）

160-0004 東京都新宿区四谷3-5 太陽コンサルタンツ内 小泉浩郎

電話03-3357-5916 FAX03-3357-3660

E-mail k.koizumi@tayo-co.jp

★山崎農業研究所サイト新アドレス

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

<丹羽敏明の戦争体験> 15、英軍の死体発掘をやらされる

7/25

今日の作業場は冷凍庫から食肉を取り出してトラックに積載する作業である。背の高い日本人ぐらいの大きさの冷凍した牛肉を冷凍庫から担ぎだしてトラックに載せるだけなのだが、炎天下にあるトラックと冷凍庫の往復を繰り返すのは、冷凍肉の重さもさることながら、極寒の地と灼熱の地を走って行ったり来たりするわけだから体の生理が狂っておかしくなる。貧血状態になって倒れる者も出た。休めるのは満杯になったトラックが出て代わりのトラックが入ってくるまでの僅かな時間だけである。1分でも2分でも時間があればしゃがんで休む。出来れば寝ころんでいたい。昼食は相変わらずビスケット4枚。英軍からは、現在支給しているカロリーは捕虜取扱規定を下回るものではなく、栄養失調になることはない、再三通告してきたが、満腹感に慣れたわれわれには到底受け入れられるものではなかった。帰路の行進はいつも皇軍にあるまじきだらだら歩きだった。

別の日、ジョホール水道に近い丘陵地帯に連れて来られた。ここは英兵の遺体を埋葬してあるところである。その遺体を掘り出して英軍の将校が検分し、OKになれば別の場所に埋葬し直すという作業であった。1mほど掘ったところに遺体があった。すでに腐乱してコンビーフのような状態になっており、その死臭の強烈さに目まいがして意識が遠のきそうになった。掘った穴の外には毛布が置かれており、その上に遺体を取り出せという。棒きれでやろうとしたら手で持って丁寧に扱えと言われ辟易した。仕事じたいは重労働ではなかったが、キャンプに帰ってからも、またその後数日は臭いが鼻について食

事も進まなかった。

作業場の中で隊員が最も行きたがっている所がある。それは食糧倉庫である。そこには缶詰の入った木箱が雑然とおかれており、それを整然と並べる作業であるが、井桁に積み上げて10段になれば40個になることは日本兵なら誰でも暗算でわかる。ところが英兵に40個だと言っても納得しない。彼は一つ一つ数えて40になったとき初めてOKという。英兵の知能程度はこんなものかと初めてわかり優越感を覚えたが、この程度の知能しか持たない国民に負けたのかと情けなかった。この作業場での得点は盗食である。缶詰の木箱をわざと落として壊し、こぼれ落ちた缶詰を、井桁に5〜6段積み上げた木箱の真ん中の空洞に放り入れる。その空洞に交替で忍び込み、密かに持参した缶切りで缶をあけて中身を食べる。肉の時もあれば魚の時もある。果物の時もある。英兵の目をかすめて食べるのだから味わっている暇はないが、空腹というより飢餓腹にとってこれほどの御馳走はない。後で罪の意識がなかったことが反省させられた。この盗食のやり方は缶切りと共に申し送り事項になっていた。

作業場の行き帰りは隊列を組んで歩いているが、途中、華僑の労働者を乗せたトラックに出会うと、彼らは必ずわれわれに向かって「バカヤロー」と怒鳴る。はじめはムカッとしたが、毎度のことだから平気になる。こちらが動じないと見るや今度はタバコを箱から出してばらまく。タバコ好きにこれを無視せよというのは酷である。皇軍兵士の誇りも見栄もない。タバコ拾いに隊列が乱れる。それを見て華僑がやんやと囁す。私は、タバコは無ければ無いで済ませられるのでみっともなさにも目を覆いたくなるが、キャンプへ帰って拾ったタバコを勧められると断り切れないのだから我ながら実に情けない。

<日本たまご事情> 「どうして卵はこんなに安いの？」 愛鶏園・斎藤富士雄
8/5

今年の卵価は戦後最安値が予測される、理由は需要をこえた生産過剰である。採卵業界は戦後何度となく低卵価と高卵価を繰り返してきた、これではならじと業界を安定させるべく種々な対策がたてられた。行政指導による生産調整はその最たるものであろう、これも長年試行錯誤したが十分機能したとは言えない。

以前なら、今年のような低卵価に見舞われると、生産者は生産調整の強化の大

合唱となった、政治的に問題を解決しようとしたのであり、今年はそれも無い。行政指導による生産調整などで問題が解決しないことを業界は理解したのだ、業界は成熟した。経済の問題は経済で解決していく、今までもそのとおりであったが、今年さらに明らかになるだろう。

米、牛乳、の世界ならいざ知らず、タマゴは今までも政治の力の外にいた、結果的にはそれが良かったのであろう、政治に頼らず自分たちで力をつけてきた。そして世界中でも一番タマゴのマーケティングに成功した、5000万人以上の人口を持つ国で、日本は一人当たりダントツの鶏卵消費量である。これは鶏卵業界が戦後、競争を繰り返しコストを下げ、他の食品より「お値打ちなタマゴ」を国民に提供したからである。

今年から来年にかけて、経営規模の大小を問わず脱落するものが出てきよう、そしてバランスがとれる、それに耐えることが避けられぬことであり、厳しいが日本の鶏卵業界を強くする道であり、消費者の皆さんに支持される道と確信する。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

<森 清の読後感> 鶴見和子・多田富雄『邂逅・かいこう』藤原書店、

2003年6月刊、2200円+税

8/2

鶴見和子・多田富雄『邂逅』藤原書店、2003年6月刊、2200円+税

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=03028901>

[二つのスーパーシステム相聞]

1995年12月に1918年生まれの社会学者鶴見和子が、2001年5月に1934年生まれの免疫学者多田富雄がそれぞれ脳障害で生死の境をさまよい、しかし2人とも障害が残りながら回生した。その2人の02年5月から03年3月にかけての往復書簡である。

鶴見は言葉を発せられ、多田は発せられない。往復書簡は鶴見がテープで、多田がワープロを使っての便りだと、それぞれが生き残っている自己能力を最

大限に発揮しての語り合いである。2人とも脳の思考力をつかさどる部分が傷まなかった。それが幸いであった。本書を読むと、ほとんど身体的障害が思索の妨げになっていないと思われて驚嘆させられ、勇気付けられる。たとえ思考部分に障害が発生しても、健常者にはわからないながら、何かは思い、喜び、願っているのかもしれない。問題は、表現する気力を保ち、それを喜びとするかどうかである。藤原書店がお二人を支えたように、健常者は障害者を支援してその表現、行動を保つようにしたい。

往復書簡は、互いのからだに気を遣いながら、生涯に探求してきた主題を少しでも発展させようとしての切磋琢磨である。

鶴見は、自己を掘り下げていって「われ」を発見する。根源的な自分を表現するには、そのやまと言葉が最適だという。回生してつくづくそう感じたというのである。多田は、その「われ」は「実存的自己」かと答える。鶴見が西欧的思索から解き放たれ、多田が西欧的思索を突き抜けて思索しようとするその姿勢が、ここに顕著である。

鶴見はアメリカの大学で身につけた方法論を日本社会に応用して独自の「内発的発展論」（人にしろ社会にしろ内側の高まりが重要）を樹立し、多田が免疫学者として国内で学びつつ国際的活動をして独自の「スーパーシステム」理論（人間は免疫というすごいシステムを基本要件にしている）を発見し確立したその生涯の、その「縁」（えにし）が思考方法に違いを見せながら、それぞれに適した思索方法で真実を追究し、それぞれに深いところを得ている。私はそのことに興味を感じた。道は違っていても到り着くところは一つであるようだ。

多田は、アメリカが対イラク戦争を始めた03年3月20日付け書簡で、「どうも最悪のシナリオになってしまいました」と語り掛けた。鶴見は、「地球上が単一の文化になってしまえば、創造性の根源は絶たれてしまうだろう」と指摘し、「異なるものが異なるままに共生する」ことを思索し続け、そう行動すべきだと提起している（「あとがき」）。

その鶴見の指摘は、南方熊楠の考えに基づいている。「異なるものが異なるままに共に生きる。お互いに助け合い補い合って共に生きる関係にある。そのことによって地球の上に人類が生きながらえることができる。そういうふうに私は南方曼荼羅を現在に照らし合わせて読んでおります。」（P150～151。02・12・01 付け書簡）

多田は、鶴見の発言に先だって科学者は「領域を超えて、対話することが必要」と訴え、遺伝子レベルとゲノム（遺伝子の総体）レベルとをそれぞれ別途

に研究する科学者の態度を批判している（P128）。その姿勢からは共生の思想が生まれないというのだ。

私には決して易しい書ではなかった。多田の本は数冊書棚に並べてあるが、理解し得ていない。鶴見の文はほぼ読んでいて、特に倒れてからの書に感動している。そうした私ながら、本書を読んで人はいかにして人たりうるかの息吹に心洗われた。本書は、鶴見と多田の文章に親しむことの少なかった人にも、新鮮な読後感を与えるに違いない。

真実には人においても社会においても、深い層の中にある。本書は、真実を発見し生きるためには、表層の、あるいは現象の政治現象や個人の思想、または社会の宗教に止まっていたはならないと教えている。21世紀への遺書と評せられる書である。

森 清

<http://homepage2.nifty.com/morikiyoshi/>

<助けられた話> 「終戦後の陸海軍学徒はどこへ？」原田 勉

1938（昭和13）年から始まった国家総動員法によって国民はすべて戦争遂行優先の統制に巻き込まれた。徴兵前の中学生なども学徒動員によって軍関係学校に志願し、あるいは軍需工場に動員されるようになった。

そして7年後、敗戦になって各地に混乱が起きた。これは一つの戦後史料。

1945（昭和20）年、終戦後の文部省の対応は素早かった。

8月16日、学徒動員解除につき通達。8月24日学校教練・防空関係訓令などの廃止を通達。8月28日、9月中旬までに全学校の授業再開を通牒。

8月28日、閣議において陸海軍諸学校出身者・在校者を無試験で文部省所管学校へ転入学させることを決定した（文部行政資料・「終戦教育事務処理提要第1輯」による）。

当時の内閣は東久迩宮稔彦首相兼陸軍大臣、海軍大臣米内光政、文部大臣前田多門だった。当時の詳しい事情は判らないが、前田文相と文部省内の良識的
事務官が占領政策が始まる前に対処したと思われる（翌21年4月の入学者からは軍諸学校の出身者はGHQによって入学数を制限され、入学時期も7月に

ずれた)。

この閣議に基づく具体的措置は陸海軍省文部省間の協議により9月5日文部次官より帝大官公私立大学長に実施要領が通達された。その大要は9月7日の新聞に「学科試験も行はず 転入学の門開く 軍諸学校在学、出身者へ」と報道された(朝日新聞二十年九月七日号参照)

(この中に、転入学者は居住地の最寄りの学校を志願すること。陸海軍諸学校長の交付した証明書を提出。手続きは10月1～15日に出願、口頭試問・身体検査の期日は学校できめる。10月末日までに入学者を決定、本人に通知する。転入学期日は11月15日とある)

こうして、私たちはGHQに干渉されることなく、文部省の制度により国立の東京農林専門学校(現・東京農工大学)へ転入学できた。転入学生は陸軍士官学校、陸軍幼年学校、陸軍経理学校、陸軍予備士官学校、海軍兵学校、海軍予科練習生、高等商船学校出身者などであった。

受け入れ側の東京農林専門学校では一部の教授から「軍国主義者どもを何も好んで入れることはない」という意見もあったとか。それに対して小出満二校長は「好んで軍隊に入ったものではなく彼らは被害者だから、できるだけ多く受け入れよう」という話をされたと聞いた。ことに定員オーバーの49名を収容して貰ったので、われわれの今日があると思う。軍国主義教育から戦後民主化教育への転換に悩み混乱もしたが、敗戦からの2年半の学園生活で優れた教師と多くの友人に恵まれ、現在も90人余りの同期生が助けあっている。

卒業後は多くが農林省と東京都の行政や試験研究機関あるいは大学・高校学校教育の現場で活躍している。しかし、戦後の混乱期であっただけに、他の業種や自営・家業を継ぐものもあった。同期生で変わり種は日中旅行社社長、不動産業、劇作家、ジャーナリストになった者もある。この多彩な人間関係が私の仕事を支えてくれたと思う。

卒業して55年になり、残り少ない余生を考え、今までを振り返って学恩を受けた恩師や助けてくれた学友の皆さんに感謝の念を捧げたいと思う。

<私の近況報告> 7月24～8月6日(広島・桜隊原爆忌に参加)

7月25日、近藤康男先生の自宅にお見舞いに行く。右目の白内障の手術は無事終えて昨日退院された。視力回復にはまだ時間がかかりそうだが、28日に検診のあとは面会も出来そうだという。

30日午前中に梶井前農工大学長と阿部教授と同行して近藤康男先生のお見舞いに行く。久しぶりに教え子と面談し、喜びの表情があらわになりました。

「室内でも杖を使って歩く練習をし過ぎて過労になると医師に注意された」と笑っておられました。しかし視力は手元も見えず不自由のようでした。

31日、農文協図書館のサイトに近藤康男先生のホームページを移管するように提案する。(継続審議中)

<http://nazuna.com/>

は、原田太郎の個人管理ドメインであるので恒久保存が難しいからである。近藤先生が「書籍の保管は図書館が一番」とエッセイで書かれたように、ホームページの保存も図書館サイト内で管理保存されるのが一番である。

8月1日、T・K病院で腹部エコー検査で当面処置すべき異常なし。

8月2日、T脳外科でMRI撮影を受け、診断がくだる。「3年前の脳出血の痕跡と微細な脳梗塞の跡が見られるが大きな変化は無い。動脈硬化は良く判らないが身体の動脈硬化は前に検査した通り進んでいるので脳も同じと考えられる。」つまり、現在危険な兆候は無いが血圧には気をつけろということだ。

8月4日、<体にやさしい鍼灸のはなし>の山下院長に報告して、眼の止血の灸を親指の大骨穴(ツボ)にすえて貰う。自宅でも1日1回、自分でお灸を据えろと指導を受ける。

<http://nazuna.com/tom/yamashita-ac/index.html>

8月5日、Y眼科の検診で眼底写真を見せられ「微細な出血は動脈硬化が進んでいる証拠で止血剤の処方をする」と診断される。眼を使わないでぼんやり過ごすことの難しさをしみじみ味わう。頼りはラジオだけ。

8月6日、今日は目黒・羅漢寺の「桜隊原爆忌の会」に参加して読者の長谷川さんと共に広島原爆を思い出し、戦争の危機迫る中に「あやまちを繰り返しません」を改めて誓う。

8月7日、山崎農業研究所の幹事会で『電子耕』の説明を行う予定。

◆農文協図書館は8/10から8/17まで夏休みで休館になります。原田勉も出勤しませんからご承知おきください。

次回116号から発行は不定期（8月下旬～9月上旬）の予定で調整中です。

★

『メールマガジンの楽しみ方』

<http://nazuna.com/tom/book.html>

の電子書籍販売中！税別¥560

★

是非、この機会に「電子書籍」というものを体験してみませんか？

★PDABOOK.JP-電子書籍のメガストア

<http://pdabook.jp/pdabook/partner/nk/>

★SpaceTown ブックス

<http://www.spacetown.ne.jp/dynamic/app/F101/book/index.jsp>

の書名検索欄に メールマガジンの楽しみ方 と入れると出てきます。

読むには、ブンコビューア というソフトのインストールが必要です（無料）。

<http://www.spacetown.ne.jp/xmdf/viewer.html>

各種 PDA [personal digital assistance] =携帯情報端末 だけでなく、

★Windows パソコンでも読めます。

<電子書籍の魅力>

文字の大きさを（パソコンでは書体も）自由に変えられます。

利用シーンに合わせて縦書き・横書き表示も自由です。

自動再生ができます。

新刊同時発売本もぞくぞく登場。

日本語の読めるパソコンなら世界中で入手可能。

品切れを気にする必要がありません。

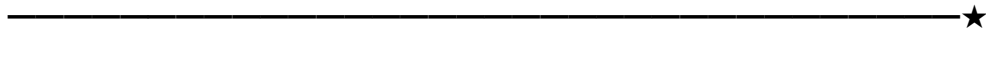
★ご注意

電子書籍版は印刷しようとする「このページは印刷が許可されていません」とだけ印刷されてしまい紙が無駄になるのでご注意ください。

購入にはクレジットカード か BitCash (電子マネー)

<http://www.bitcash.co.jp/>

または、NIFTY 会員、BIGLOBE 会員であることが必要です。



◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名(見出し)を必ず書くこと。読みたくなる見出しを簡潔・明瞭に。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的にズバリと書き出す。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めの方に書く。
- 3、1回1テーマ、書き出し・本文・結論を10行位にまとめる。
- 4、送信する前に、何を言わんとするか、読み返し、推敲することが大切。
- 5、ホームページを持っている人は、文末にURLをつける。
- 6、JIS X0208 規格外の文字(機種依存文字)のチェックをする。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。html メールもご遠慮ください。

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/10.html>

<本誌記事の無断転載を禁じます>

★不定期刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』」 第115号

バックナンバー・購読申し込み/解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

2003.8.7(木)発行 西東京市・ひばりが丘 原田 勉

<mailto:tom@nazuna.com>

発行部数 1707部 **ここまで『電子耕』*****